英語運用能力取得のための多目的アプローチ

Multipurpose Approaches for Acquiring English Proficiency

宇田　和子[1*]、佐々木　良介[2]

UDA Kazuko[1]、　SASAKI Ryosuke[2]

１埼玉大学　教育学部
Faculty of Education, Saitama University
２（株）デラ・クルーズ
Dela-Cruz, Co.Lit.

Abstract

Uda and Dela-Cruz carried out a joint research about how to acquire English proficiency during the academic year 2007, which brought out findings as follows: (1)4-step learning method is effective. (2)Class attendance influences big for development. (3)Students should be motivated by teachers, classmates and also from the social environment. (4)English script writing enhances English skills inclusive of speaking. (5)Cooperation between an English conversation school and a university offered different approaches to the learners; as a result learners could cultivate varieties of abilities.

Key Words : English Proficiency, 4-step Learning Method, English Script Learning

１．はじめに

（株）デラ・クルーズは、さいたま市大宮区にて英会話スクール Dela-Cruz English Club を経営している。（以下、同スクールをＤＣＥＣと記す。）宇田とＤＣＥＣは平成１９年学年度の１年間、英語運用能力向上の方法を探るため、埼玉大学教育学部において宇田が担当する授業科目「英語圏文化論演習」の中へ、ＤＣＥＣの指導方法を取り込んで共同研究を実施した。研究の目的は３点あった。（１）ＤＣＥＣが提唱している英語指導方法が、英会話能力向上に有効なものであるかを検証すること、（２）ＤＣＥＣメソッドにおける改良点を検出すること、（３）広く英語運用能力を向上させるために、どのような方法が有益であるかを検討することである。

前期および後期の授業結果から判明したことは、ＤＣＥＣメソッドは、英会話能力向上に有益であること、授業やレッスンに欠席しないことが大切であること、優秀な指導者が望まれること、学習意欲を高めることが必要であるが、そのために時間的環境・社会的環境が大切であること、そして、英語を書くことは書く力のみならず、会話力も増強させること、であった。さらに、埼玉大学生からもＤＣＥＣラーナーからも、産学が連携して学びの場を形成することは、多面的な視点から英語にアプローチすることであり、能力開発は幅広いものとなる旨の、授業評価を得た。

２．ＤＣＥＣメソッド「体で覚える英会話」習得法の特徴

ＤＣＥＣ代表取締役である佐々木は、ＤＣＥＣメソッドを以下のように説明する。

〔１〕テキストは、①英文②和訳③ＣＤがセットになったものを使う。〔２〕学習の流れは、①和訳でテキストの意味を確認してから英文を確認する②ＣＤを毎日１０分聞く③テキストを毎日１０分音読する④１週間、自己学習を繰り返す⑤レッスンに参加する。〔３〕学習の要諦は、①聞く・話すを繰り返し、体で覚える②毎日英語に触れる③レッスンにおいて、自己学習した英語を自分の言葉として使う。

[1*] 〒338-8570 さいたま市桜区下大久保 255
電話:048-858-3632、E-mail : kuda @ mail.saitama-u.ac.jp

さて、上記のＤＣＥＣメソッドの特徴は２点ある。（１）テキストに付加された和訳を用いて、テキストの意味理解から始めること、（２）短時間であるが、毎日の学習を勧めていることである。（１）の意味理解は、外国語学習者がいつでも行っていることである。まず外国語を読むかもしれない。まず母国語訳を読むかもしれない。辞書を引いたり、書籍を参照したり、指導者に尋ねたりするかもしれない。いずれにせよ、外国語学習者が求めるものは「意味」であり、そして広くコミュニケーション自体の目的も「相手の意図するところの意味理解」である。「意味から始める」というのは、自然な学習者心理であり、自然な英語学習過程である。（２）もまた、多くの学習科目で実践されている方法である。学校の時間割において、例えば小学校では、「国語」「算数」といった基本教科はほぼ毎日授業コマがあり、「〇〇教科特区」となれば当該教科に対し、多くの授業時間が振り当てられる。反復は習得を促進する。しかしＤＣＥＣメソッドにおける「毎日」に関し特筆するべきは、「毎日」を強調してラーナーの学習支援を行っていることであろう。

３．前期授業方法と前期状況

前期を「予備調査期」とし、学生の反応と英語力の変化を概観し、指導方法の有益点・問題点・詳細に調査すべき点の明確化をはかった。ＤＣＥＣメソッドを取り入れた「英語圏文化論演習Ａ」の授業方法は、以下のようであった。受講者に、毎日ＣＤを聞きテキストを音読すること、授業参加時にはテキスト内容とテキスト英文は理解されていること、を繰り返し告げて、常に自己学習を促した。テキストは、ＤＣＥＣで使用している『ＣＮＮインサイド･アメリカ』、編集：『CNN English Express』編集部、出版：朝日出版社、２００５年を用いた。毎回の授業の流れは、１０点満点の小テストで前回授業の確認をする、テキストＣＤを聞く、テキストの音読をした後、内容理解を深め、テキスト・トピックに関する英語ディスカションをする、というものであった。前期試験は英語論説を４題書くという形式を取った。受講生は１１名であった。

前期予備調査終了時に得られた把握事項は、（１）ＤＣＥＣで提唱する学習ステップは受講生に好評で、かつ当然の学習ステップと了解されていたこと、（２）授業欠席が少ないほど、会話の流暢性も英文論述力も優れること、（３）読みやすい手書き文書を書く学生は、英語のライティング能力もスピーキング能力も高い傾向があること、であった。

４．後期授業方法と後期結果

前期を踏まえ、後期「英語圏文化論演習Ｂ」を実測期とした。テキストは前期を継続し、ＤＣＥＣの学習ステップを踏んで自己学習をするよう念を押し、授業方法も前期同様とした。しかし新たに、４点の事柄を導入した。（１）ＤＣＥＣのガヴァネスによる３回の派遣授業、（２）スピーチ・テスト、（３）テキストの手書き書写提出、（４）共同研究に参加した人々からの授業レポート収集、の４点である。後期試験はスピーチ・テストおよび英語論説記述とした。受講者は全１０名で、前期からの継続８名、新規２名であった。

後期結果を以下の表で示す。受講生は番号１～１０で表記した。小テストは各回１０点満点の平均である。スピーチ・テストは、第１回と第２回においてはガヴァネス派遣授業の次週に実施し、テーマは"What I thought about the governess' lesson."とした。第３回は後期試験の一環とし"What I could learn from this course."とした。英語で自由に自分の考えを書いてもらった。下記表中、上段は発話長さ（秒単位）、下段は流暢さおよび正確さ評価である。後期試験論説は、テーマを"To Criticize American Culture"とし、１５分間で記述してもらった。表の上段は論説文章の長さ（単語数）、下段が内容や英語表現における正確さ評価である。書写に関しては、すべての提出物でテキスト英文の転記ミスは無く、評価観点はきれいに整理されて丁寧に読みやすく書かれているか、に集中した。Ａを４点、Ｂを３点、Ｃを２点、Ｄを１点とし、それぞれの評価点Ｘ回数で得点化した。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	１０
小テスト	n.d.	9.6	9.9	10	9.7	9.8	9.3	10	10	7
第１回	欠	40	* 60	* 90	* 90	45	30	30	* 180	欠
スピーチ		* A	B	B	* A	B	B	C	B	
第２回	欠	* 60	35	* 60	45	55	30	45	25	欠
スピーチ		B	* A	* A	* A	* A	B	C	B	
第３回	欠	*120	*135	*180	*150	*180	*60	*120	*300	欠
スピーチ		* A	* A	* A	* A	B	B	B	* A	
論説単語数	欠	80	*160	120	*150	70	*150	80	110	欠
論説評価		* A	* A	* A	* A	* A	B	B	* A	
書写提出回数	0	8	8	8	6	2	5	4	0	5
書写評価	0	* 30	* 29	*29	* 23	2	15	12	0	13
欠席回数	13	* 0	* 0	* 2	* 0	3	3	4	*1	10

表において＊が付加されているものは、スピーチ・テストの長さでは６０秒以上、論述では１５０単語以上およびＡ評価、書写評価合計２０点以上、欠席０～２である。

３回のスピーチ・テストを辿ると、回を追う毎に高い評価が増加し、正確でなめらかな発話能力が身に付いて行ったことがわかる。長さに関しても、１回目に比べ３回目は全員がスピーチ時間をほぼ倍増させている。論述では受験者８名中６名がＡ評価であり、学術的な英文を書く能力も身に付けてきたことがわかる。ガヴァネスとの会話実践・ステップを踏んだ学習方法が、話す力・書く力を増進させたと言えよう。

上記英語力増進の要因を検討する。後期結果表において、優れている数値には＊を付してあるが、スピーチに優れている学生は、２番、３番、４番、５番、９番の学生となろう。（＊数４以上。）論述に優れている学生は、３番、５番の学生となろう。（両項目ともに＊。）さてこれら学生に共通しているのは、欠席が少ないことである。そして書写の提出回数が多く高い総合得点を有する学生（２番、３番、４番、５番）は、スピーチ能力も高く論述能力も高い。英文を書くこと、は英語を話す力も書く力も伸ばすのである。後期のデータから言えば英語力増強の鍵は２つある。①欠席しないこと、そして②丁寧な手書きをすることである。

５．結論

派遣講師 Riza Bromo は、学生たちがステップを踏んだ学習を続けていたことを見て取って、レポート中で以下のように書いている。"The students definitely study diligently (i.e. listen to the CD, read on their own, etc.) because they are familiar with the topic under discussion and answer comprehension questions correctly." 学生からのレポートでは、全員が派遣レッスン受けて「非常によかった」と評価し、ガヴァネスのレッスン技術・内容を高く受け止め、さらに大学教員以外からレッスンを受けるという刺激も高く評価した。そして佐々木はレポート中で、英語運用能力増強のための提案として、学習時間が確保できる生活環境、英語を必要とする社会環境の重要性を強調する。

ＤＣＥＣメソッド取り込んだ授業を１年間行い、学生の英語力は増大した。派遣授業やＤＣＥＣヴィジィターを通して人的交流がはかられ、埼玉大学生およびＤＣＥＣ、両サイドの視野が拡大した。視野拡大はさらに進み、英語を取り巻く環境へ考察は進んでいる。英会話能力向上を主目的とするＤＣＥＣと、英語文化研究にも目的を置く埼玉大学授業が合体することにより、より多くの目的が英語運用能力獲得の過程で達成されて行ったと言えよう。